

思想とその基盤

——インド古代経済圏の拡大——

高橋堯昭

社会はその中に生存して居る人間を通じて自己自身を表現するという。むしろカレントの第三批判流に言えば社会は自己自身を自己表現せんとして、その中に究極目的として人間を生んだとも言い得よう。

この表現されたものが文化であり、その内容の一角が思想である。故に文化、思想はその社会に生存する人間のその社会に対応する自覚の仕方と言い得よう。

従って文化や思想はその社会、生存の基盤即ちその民族性及び風土性を反映して来るのは当然と言えよう。

然し私はこの環境が思想を規定することのみを主張するのではない。このマルクスの下部構造が上部構造を規定する面の否定出来ぬ如く、又上部構造自身の自己展開（観念上の発展）や又この出来上った思想たる上部構造は逆に下部構造を規定する面のあることは十分認めなければならぬ。

私はこの点から、印度の古代社会を瞥見してこの思想と社会との「交互性」^{ベラフセルベフインフンク}を探究したい。

(1) 牧畜から定居農業へ

古代インドにはドラウイタ系の住民が住んで居た。こゝへインドアーリヤン民族が侵入して来たことは自明のことである。

然もこれらはその侵入以前から「その社会の古老達が若者に、その社会を維持するための教訓、処世の法や、その民族の伝説等を口伝えに教えた教訓たるリウベータ」を形成し、その統率のもと東進し、やがてインダスの上流五河地方でベータ文化の華を咲かせる。

もとゞ／＼ドラウイタ系の先住民は狩猟で母系制の社会を形成して居たが、この新来の民族は「父親を大家族の長」とした家長制で、最初は牧畜を行つてゐた。このことはベータ文献やら仏典の中にも出てゐる。

即ち①ベータ文献ではバラモンの主神の一たるインドラに奉る頌歌のうた声を仔牛に呼びかける牝牛の咆声に比し、祭祀をいとなむ司祭人の謝礼をダクシナ（歌手の右手に置かれたる牛）といふ、或は戦争（Gavishi）は牛（Gavish）を希望する意で、長者はGopaで牛の守護者牛群の王といつてゐる。

②仏典では「酪とか酥（乳製品バターチーズ）」が最上の美味の例として随所にあげられて居る。又現在印度では牛が聖なる動物とされて居ること考え合せて見るのに、暑い印度ではバターとかチーズが唯一の保存食であり、又牛乳がその蛋白質源であつて、その供給源の保護は当然であらう。こうした無意識の知慧、社会的要請からのノルム化が興味ある問題を提示する。

やがてガンジスとインダスの中間地帯に進出し、如作へ移行し、又そろ／＼水田の農業をはじめた。

こゝに於てこの新来の民族にとって重大な問題が出来する。それは少数民族が数の上では多数の原住民の中に入つて行く時、混血が生じて、やゝもすれば、民族の消滅の危険にさらされて来る。特に民族が一定の所に定着化が進む

につれてその危険は増大する。

然も文化の高い民族に於ては、その自負からどうしても、そこに何かしらの手段が考えられねばならない。所謂種族の本能として。

これは恰もバビロニヤや或はエジプトの高度の文化にふれたユダヤ民族がカナン土地で作り出した選民思想と現を同一にする。

従つてペーグの中に「色の黒い、鼻の低い悪魔が云々」と散見するのは、この非アーリヤンからの区別であり、これが「太初に於て神々が原人を犠牲獣として、祭式を行った時、かれ原人の口はバラモンに、彼れの両肘は王族となり、彼の両腿はヴァイシヤに、両足からシュードラが生れた」という表現となる。然しこの区別も最初は四姓の嚴重な区別ではなく、非アーリヤンとの区別が重要問題であつた。

然しながら、ガンジスの上流へ進出し、水田農業が本格化するに及び、土地の所有者と労働者との分離、或は水利権にからんで権力者と一般民衆の分化というように社会が複雑化し、社会組織が段々とかたまつて四姓が階級として固定して来る。これがBC千年頃と推定される。

やがてガンジス河の流れに沿つて下り行き肥沃な土地に定着、その農耕社会を強固にして行く。為に牧畜的性格をもつた、このペーグの神々も、この知作から水耕へと生産形態が変るに従つて、その性格に於てモンスーン的インドの性格をいよく顕著にし、その宗教的態度もいよく印度的風土を代弁するような形になつて行く。

即ち農耕民族特に印度の如き水耕民族にとって水をはなれては生活出来ない。印度の大自然にとつて一寸した雨期の到来が、その穀物生産の上に重大な影響をもつ。ほんの数週間おくれただけで、一大飢饉を生ずる。然も一旦大雨

が来れば、ガンジスの下流地帯や低地は海となり、田畑の実りを流して了う。そして何千万もの流民を生む。然も水を否定することは出来ない。乾期になれば飲み水とてない。更に広漠たる大平原、堤防を作って防ぐような生易しい大自然ではない。唯幸いなことに熱帯のこと故、何か植えて置けば自然と出来る。こゝに自然の恵みの逆影響がある。暑さによる労働意欲の減退に加えて……。このようなあなたまかせの農業、ひいて生活態度から唯自然にのみたよる性格が生じ、大雨、暴風、洪水、旱魃、はてはイナゴの害等までも神格化し、この神格化されたものの組合せが、我々の運命を司ると信ずる多神教に進んで行く。太陽のヴィシヌ・スーリヤ（時代によって神名が変る）に植物の生長を祈り、インドラに風雨の適順を乞うというインドの宗教が生じた。

このような独立した自然神的多神教が段々統一されて来る。然してバラ／＼なものが統一されるにはそこに一にする自覚作用即ち哲学が要請される。これからウパニシャッドの哲学でありその一者がブラフマンである。

そも／＼ペーグ宗教の特徴は、神に恵みを得たいと思うものは、ペーグの讃歌や祭祀を完全にすることが必要とされた。即ちこの讃歌や祭祀の中に超越者であるブラフマンが宿っているとされている。従って祭祀、祝詞の主体の中に必然的に宿ることになる。これを論理化したのがブラフマンIIアートマンのウパニシャッドの哲学である。このように内在化の傾向はモンスーンのインドの特徴である。

即ちこれはこれと対立する概念たるアラビヤの宗教と比較すれば明らかであろう。

即ちオワシスを生活の場とするその宗教では、そのオワシスは多数の人々の住む所ではない。生きるか死ぬかの斗争が行われ、これを確保するか、又契約して（この思想はキリスト教と共に西洋に入って重要な市民社会の概念となる）水と草地を得るかしかない。そこに首長を中心とする強い統率と斗争の宗教が成立する。更に砂漠に於ては自然

に恩恵を与えるものは何もない。自然のまわりは死である。こんな所に自然の外に神を求める即ちその宗教が超越神的とならざるを得ぬことと考え合せれば理解されよう。

時代と社会は年と共に進展する、そのベータ文化とバラモン支配の進展も、このようにその社会組織が固定化することにつれて、閉鎖化することは前にのべた。然して唯それだけではない。後に述べる如き新しき社会と新しき理念の成立（仏教・ジャイナ教）をアンティテーゼとして、これに対抗、ますくその固定化と閉鎖性を増して行くのである。

もとくはインドアーリヤン自体は共和的国民であった。これは牧畜民族の常として（アラビヤも）首長の下すべて平等な権利をもち、又村落を形造つても村落の東西南北の四門の交叉する所に必ず公会堂をもって居たことが仏典やベータにも見られることからして明らかである。

このような本来民主的共和的思考方法と固定化し行く農村経済の社会構造とのギャップ、矛盾、この矛盾対立が新しい社会と思想を生むのである。

(2) 新世界の據頭

人々はやがてガンジスの上流より、段々下流の肥沃な土地を求めて下つて来る。こゝに水田化は益々進んで行く。そもく畑作と稲作ではその歩どまりが全然違ふ、稲作は非常に作物の効率がよいのだ。

特に稲作になると灌漑、水路等その構造が複雑化し、更に共同化する面が多くなって次第に聚落を作るようになる。

これはバラモンのラーマ・ヤナに灌漑用水の水道の話が出ているし、仏教のダンマ・パーダーには、灌漑用水々路 (caṭṭika) は一般人の熟知のもととして前提しているから、このような状態にあったことが分る。

然うしてこれにより更に生産物もあがり、分業化して聚落になれば、余剰の農産物も交換の場所及び、交換を業とするもの商人も生れ、且又、こうなると物資が一切、交換値に換算されるようになる。やがて貨幣による交換即ち、商業が当然成立つようになる。

この転換期が、大体前六百年から前五百年頃と推定される。更には聚落が集合する国家が形成されると、その中心地たる都市が形成される。然しそれは、あくまでギリシヤ的なポリス、都市国家とは異り、インドの都会は、村落農村と別な存在でなく農村の活力により立つ、通商交通に便利な河のほとり等に成り立つもので、これがインドの都会の特色であり、インドに都会はないといわれる所以である。このような都会が各地に成立してきて、商業により経済力が活発になると、どうしてもクシャトリヤ階級や、実際に政治を司る階級が力を得、バラモン階級との間に力の交代が出て来る。更にこの自由な都市めざして自由な思想家がこれと歩調を合せて集り、バラモン文化とは全く異質な文化を生むようになる。

例えば、ウパニシャッドの哲人の中に、戦士階級の人が多くみられるようになりバラモンの中でも六師外道の如き活潑な動きが出て来る。然しバラモンの主流は逆に政治の大学を作り、宮庭及び国家行政に深く参与せんことを願ひ、且つ又日常の些細な事にまで煩瑣な規定を、宗教的行動、或は、贖罪法を設けて国民の公私の生活を規定統一せんとする。

これは先に述べたごとく、バラモンは祭祀によって神々を満足させる、これは神秘的力が祭式や咒文や祭式に誤りがあると、災がたちどころに襲来して破滅の原因となるとされる。こゝにバラモンが悪意を持ったり、わざと間違えたり、意中ひそかに咒ったりするのを恐れるが故に現実支配はまず／＼バラモンの手の中に入ってゆく。更に教義的

にバラモン支配を支える為、業、輪回の思想が形造られてゆくのである。

このような二つの相反する時代の流れ、即ち、時代の自由化の傾向が激しくなればなる程、その既存の特権を守らんとする反動もはげしい。一方は、商業の発展にもとづく都市の自由化、更に地方は、農業経済にもとづく階級性、こゝにますゝ興隆拡大化する新世界の自己限定、その自覚として釈尊が出来するのである。

彼の釈尊が、ペーダの公用語サンスクリットから、方言俗語ブラックリットを使用したのはこの旧世界への対決の意欲を示すものであろう。

この間の消息を資料にもとずいて今少しみてみたい。

然し注意すべきことは、もとゝ印度人は、普遍を愛する国民性として個々の事象の記述、即ち、歴史、地理書は全々ない。唯残つてゐるのは仏典や、ジャイナ教の教典の中である。丁度旧約聖書が比較的歴史の表現にもかゝわらず、新約は信仰の体験書、即ち、イエスへの信仰の体験の表現乃至、信仰をもった人の書いたものであると言われているように、仏教の教典は、釈尊の言行録ではなく、その釈尊の言行録乃至、思想を言い伝えて百年乃至、参百年以降結集している為、これを資料とするにしても、釈尊の当時乃至その經典の書かれた頃との含みを考えねばならない。

即ち、当時の社会状態を示すものとして *mahāparinibhāna-Sūtra* に「商業都市ウエーサリー市のリッチャヴィ族は、或は青色、或は黄色、或は赤色、或は白色……」とあるのは、当時都市が、自由な超人種的な基盤をもつていたという社会変化が見出される。

又、階級制度が乱れてきた、即ち「王族の出身でなくとも王位につき、バラモンの血統でありながら耕作……の他

の職業に従事する」と、これは一体何の故であるか。

これをはっきり示しているものに、雜阿含經二十の「シュードラであつても財宝、穀物、金銀に富んでいるならば、クシャトリアもバラモンもヴァイシヤも、彼に対して先に起き後に寝て彼の用事をつとめ、彼の氣に入ることを行ひ、彼に対して愛しき言葉をかけるであらう」と

これは明らかに經濟の問題、即ち商業によって一切のものが流通價值によって評価され、人間関係も規定されることを示している。

更に貨幣經濟が行われていた資料としてはかの有名な物語、スグッタ長者がコーサラ國パセナデイのジエーダ太子から祇園精舎の敷地を買った時、金貨を土地に敷いたという物語である。これは明らかに貨幣經濟の進展がいちじるしく、且又、土地の所有者でない商業資本家の擡頭がくみとられるのである。

これはウバニシャッドにある「土地が言った。如何なる人間にも我を与えてはならぬ」というバラモン社会とは異質の社会の現成である。

更に仏典の中に見える職業の順位が、丁度ペーダの文献の古い韻文から新しい韻文への変化に似ている点でも、社会変化がよみとられる

摩伽僧祇律

上の職業 宝石、銅器

中の職業 売香人、坐店肆人、田作人、種粟人

下の職業 屠兒、売猪人、漁獵人、捕馬人、刑吏

ペーダの財産目録

古い韻文…財宝、穀物、田地、子妻、四足獣

新しい韻文…貴金屬、金貨、穀物、田地、奴僕、奴婢

と貴金屬、金貨が最上位へ行っているのはこの貨幣による商業經濟を示し、四足獣は農業の爲の人手労働力から、奴僕、奴婢へ変って行くのは、借金の爲に自己疎外されて奴隷化したことを示している。

然らばこの時代の商業はどのようにして行われていたのであろうか。

「師 (Satba) 世尊は隊商主 (Sātvavāha) 導師である。例えば隊商主が諸隊商をして難所 (Kānta) 砂漠を渡らしめ……盜賊難所を渡らしめ、猛獸難所を渡らしめ 安穩地に到達せしめる如く……」

(niddeśa I Mahāniddeśa Vol 2. P 466 Visuddhimagga P 208)

又、雜阿含卷第三五 (大正二・二五四下)

「一時仏跋耆人の間にあり、毘舍離國に遊行す…… 時に毘舍離國に衆多の賈客あり、 罽利尸羅國に向わんとす…… 汝等曠野の中に於て……」

又、百緣經に

「舍衛國に……彼の城中に五百の賈客あり、他邦に住詣せんとす……曠野中に經路を失い天の暑熱に遇い、渴えして死せんとす……」

以上、一、二の資料からしてみると、その時代の商業もすでに定居的商業から「砂漠」「曠野」、を越えるような遠隔的な經濟圏が拡大して、一つの世界を形づくりつゝあったことを示すであろう。(資料中村氏・増谷氏)

更に国際的にも、ペナレスの商人がバヒロニヤへ行つたという言い伝え、又、ヘルシヤのドリウス王がギリシヤのマラトンで戦つた時、インド狙撃兵が加つていたこと、又、ラジギールの旧城のナガールの祠から、ギリシヤ、ローマの奢侈品がみつかった等―海外とも何らかの方法で交渉をもつていたことは明らかである。

更にこの経済圏の拡大に対応するかの如く、国内的に十六国の対立が釈尊の時代、前後をその境として段々統一の気運に向いつゝあり、やがて、コーサラ、マガダ、アヴァンティ、ヴァンサの四国に、更に、コーサラ、マガダに、そして逆にマガダに統一されてゆく。その例として、ピンビサール王がコーサラ王の妹イダイケを妻とし、その持参金として、カシーのペナレスをもつて来たことがそれである。

当時の結婚は政略結婚と共に又、国勢の弱い国王がその娘を、国勢の強い方に妻として出したことからみて、或はマガダ国がすでに統一する傾向にあつたのではないか。

マガダはこれによって水陸の両用の要地を占め、その発展たるマウリヤ朝のアショカ王をまつての全印度的な統一の基礎がこゝに用意されていたといえよう。

このように、自由な商業経済の発展により、又政治的インドが一つになろうとする気運に対応して出て来た思想が、仏教の平等思想であり、普通思想の成立である。

海外通商にしても、異民族の多いインドの国内通商にしても、そこに要求されるのは皮肉の色、民族を越えた思想、然も通商を安易ならしむるに要請される慈悲と平等の思想、これが貨幣経済のすべてを貨幣価値に一元化する思想と対応して出て来るのである。この経済の必要から出来ると共に、逆に又より一層の経済圏の拡大と一つのインドの現成をうながすのである。

これが釈尊の自覚そのものである。そして、アシヨカ王がこの仏教の万民平等の理念をもって、ギリシヤ的なアシヨカピラーを国内はおろか、辺境の国々アフガニスタン、カシミール又最近の発掘では、ヘルシヤ国内にまでそれ／＼の国語を以て「慈悲による法」の支配をとっているのである。そして彼が、四方八方に通ずる公路の設営や並木（印度は著い為）一定の井戸、休息所を作つて、中央集権の成立に努力したのは、逆にこれによって商業の發展及び、海内外陸の一体化を企図したのであり。為に仏教の教えが、慈悲が要求され、逆にこれによります／＼一つの世界としての印度が成立するのである。これによってアシヨカ王による全印度の統一、歴史上最も強大な中央集権の国家が形成されて来る。注意すべきことは然しこれもインド的村落共同体を、全国民的整然たる組織にしたにすぎないのであつて、この共和的自治組織を抑圧する異質的な国家を作つたのではなかつた。

あくまでその主体は農村であつた所にインド文化の特質があるのである。

この時代は印度歴史に於て、特に良き時代であつた。これ程自由な激刺たる空気はかつてなかつた。これを証する例として

マウリヤ王朝（釈尊後二百年）に建立されたサンチーの塔の銘文「寄附者名簿」に特筆すべきことが見出される
即ち、

二八五名中

集團家族 一〇家族

集業僧 五四人

比丘尼 三七人

在俗信男 十一人

// 信女 四五一四七人

又他の銘文

集団 五人

修業僧 二七人

信者男 六一人

// 女 五八人

両者の計比丘 八一人

比丘尼 八三名

在俗信男一五二名

// 信女一〇三名（中村元氏参証）

これをもつても分る如く、個人の名で以て寄附が行われている。又、女性が個人の立場で寄附している。これはグプタ朝以後ヒンズー教等の寺院の寄進簿で見られる如く、人民の個人の名は国王、貴族、富者、カーストの中に解消されて了う。このことからしても特筆すべきことである。

印度に於てこの時代のように、自由と個人の意識の發揮された潑刺たる時代はなかった。然しても在俗信男女の大部分は、王、長者、商人で農民は一人もなかった。

これは明らかに仏教の地盤が商業経済に立っていて、農業社会はバラモンの地盤と明らかに地盤を異にしている。

(3) より広い世界

農業經濟に根ざすバラモンから、商業經濟に基づく新しいイデーとして、釈尊の仏教が成立する。この釈尊の自覚を通じてこれにより更に高度の基盤の進展たるより新しい社会が成立する。より普遍的な世界が。

この一つの世界の達成への傾向はインドだけのものではなかった。即ちギリシャ特にアレキサンダー大王による中近東及びインドの征服である。これは好むと好まざるにかゝわらず、すべてをギリシャ化、ヘレナイズしようとする一つの世界の造成が、はからずも時を同じうして起る。この一つのインドと一つのギリシャ、ローマ（ヘレニズム）との二つの世界の接触交流が、こゝに北西インドを中心として行われ、こゝに東西文化が交流し、両者を合せたより大きな一つの世界が形成される情勢が、やがて到来するのである。

然し道はそう坦坦たる道のみではなく、その間に于余曲折を経て居るのである。

即ち釈尊も又時代の子、時代の自己反映である。例えばウパニシャッドの哲学六師外道の思弁哲学から出発した。したがってその教儀が釈尊の意図にも拘らず、民衆にとって余りにも高尚すぎるのは否めない事実である。これはその弟子が王、バラモン貴族の出身者が多くシュードラ出身者が全然なく、たとえ四姓に入門を解放してはあったにしても、実際は下層階級はついて行けぬのが現実であった。（ウパーリンを踐民出身とするのは後代の所伝で古い文献にはない。）（増谷氏）

この思弁性が小乗仏教の中にうけつがれて、特に人間の心の働きの分析の精密さは驚くべきものであって、人間の文化史の上に大きな貢献をなして居る。然し所謂小乗二十部或は大乗仏教の空の否定的モーメントとなつた有部の論

理等アビダルマ仏教を形造り、その思想自体の自己展開、即ち思弁的遊戯とその閉鎖性に陥って行く。この欠点を修正し進展し行く社会の指導理念として生きた教えが、この新しい大きな世界の現成に対応して出てくるのである。

時代は一日も止らぬ。かの釈尊の時代にもその端著が見られる。

即ち有名なデーバダッタの進言がそれである。又この問題が決定的となるのは釈尊滅後の第二結集である。即ち「金銭の布施をうけることの可否」の問題がそれである。即ちヴェーシャリーの教団にはこの金銭の布施をうけざるを得ぬ事情。然も正統派が大挙してヴェーシャリーに行つてデモンストレーションをせざるを得ぬ程に情勢が變つてゐた。これは明らかに貨幣経済の進展がそこによみとられる。そして上座部と大衆部とが袂を分つ第三結集は、社会の進展そのものが、この教団の内部に分裂せざるを得ぬ所までも至らしめて居たと言ひ得よう。

前にも述べた如くアシヨカ王の印度統一とその理念としての仏教、この仏教もアシヨカ王の歿後、余りにもアシヨカ王の仏教保護による財政の逼迫を招き、そしてこの打解、解決への道を、この増大した商人階級の利益に目をつけたことも当然であろう。従つて小国に分裂した、各国王によって商業交易権は取りあげられ、段々と商業資本は圧迫され、やがて商人階級は崩壊の一途をたどるのである。(この完全な没落はイスラムの侵入とローマ帝國との通商の停止による。)

然らばあのように強大を持てる商人が何故、かくも容易に没落するのであろうか。

そもく印度に於ては、元来商業資本の進展には国王等は圧力にこそなり、助けにはならなかつた。即ち「昼は国王の官吏が荒し夜は盜賊が人を苦しめる」と国王を敵視して居る。更にインドでは民衆が孤立的閉鎖的であつて、国家の支配をうけることが少なかつたし、前述の如く、印度の衣食住は人為的努力を必要としない為に國家の保護もい

らず、従つて國家に納める租税は個人収入の1/6という古代國家では珍らしい程の低率であつたにも拘らず、暴力國に収める獻納位にしか意味をもたなかつた。爲に「國王をおこらせるな、國王の支配に遠ざかれ」を「サンギヤ」の理想としたような消極的態度が、西洋のようなギルドを成立させなかつた。然し「スタッタ長者が祇園精舎に釈尊を迎えた時五〇〇人の長者が従つた」という記録は仏教流の誇張はあるにせよ、たしかに職業別組合ギルドに似た組織、後の職業カースト制度が考えられなくもないが。然しそのギルドの力も金力のみで軍隊をもたず、爲に王や官僚に容易にその商業権をとりあげられ、その力に対抗すべくもなく、その崩壞の道をたどるのであつた。

これはアシヨカ王朝の後インド全体が四分五裂となり、インド農村の孤立的閉鎖性と相待つて、限定的な小地域に於ける閉鎖的人間形成へ進み、アシヨカ王のめざした階級打破は世襲的身分制度の確立へ代り行く爲である。

更にこゝで問題となるのはギルト自体が職業別にカースト化して全体の統一が出来ず、容易に資本の國有化を行わせ商業の崩壞を必來せしめるのである。

要するに私の考えるのは、インドの風土性から来る、その消極的、性格、和辻氏の言はれる如き「モンズー的性格」の自己限定として形造られた仏教、ジャイナ教の教格、即ち平和主義の教えが、逆に社會を限定し、それによつて易々國王の手中ににぎられて行つた所に興味を引くのである。

このように印度中原地方はこの社會變動から都市は段々崩壞し、又元の農村に帰りつゝあつた。もつとも、インドの都市は西洋の都市と異りこれと獨立したものでなく、あくまでも農村に依存するものであることは前に述べた。

従つて、商業經濟の變動は容易に農村に帰り得る性格のものであつた。それに又獨立した小國の分立、世襲王朝の成立、封建性の固定化によつて、そこに要請される教は、やはりバラモンのカーストの教えの外なく、爲にアシヨカ

王の死後バラモン教の復活が急速に行われて行くのである。尤も、インド的特質として、仏教への保護と信仰は依然として続けられては居たが。(かのアシヨカ王がバラモンやジャイナ教を禁止せずに保護を加えたと同じように。)

然し、そこにはもう昔日のおもかげはなかった。

このように印度中原では、最早大きな社会変動と沈滞が起って居る間に、西北インドでは潑刺とした文化の躍動が行われたのである。

西紀前一八〇年匈奴に追われた月氏族が天山山脈を越えて入ってきて、クシャーナ王朝をきづき、三代目のカニシカ王に至ると最盛期をかざり、その範囲はアフガニスタンより中部デッサン高原へ、西はベルシャまで支配し、東は干闥等を後漢と斗う程の大国を造った。

そもくこの西北インドでは、アレキサンダーの侵入後アシヨカ王に統一されたものゝその後小国に分立し、ギリシャ人、サカ人及びベルシャ人等によって統一されていた。

これは、貨幣に、肖像をのせた王が三十七人もあったことから知られよう。特に仏教の長老ナガセーナとの対談で有名なミリンダ王は忘れられぬ存在である。然もカニシカ王の在世中に、最大範囲を誇るローマの使が月氏国を通じて、後漢に達し、又ローマへの奢侈品の輸出で莫大な利益をあげてゐたことから、東西交通がこのシルクロード沿いの月氏国を通じて交流してゐたことは十分考えられる。

特に最近の研究で、ローマではシーザーが金本位制を造り、クシャーナ朝のヴィマカドフイーセス王も金本位制をつくったが、その金貨はローマと同じ単位であり、クシャーナ朝の金貨がローマの「Aureus」貨に相当する(中村元氏)これは外国貿易を前提し、同一の経済圏を前提する、そこに東と西を併せた一つの世界が現成したと言つても

言いすぎではない。

この様に民族を越えた同一の「より大きい世界」の現成ということが、大乘仏教にとって忘れられない世界である。

且つ又、中村元氏は、ローマの貨幣が現在南方インドの海岸地方に於て、非常に多く発見されるのは注目すべきだと言われている。これはローマからの金の移入が南方インドの港を介し、その後背地での流通を意味し、南方インドの、アマラーヴァティーとか、ナガールチュニコンダターの荘大な仏教の建造物や、美術品が作られ、大乘仏教の初期の經典の作られたのは、このような社会現象と深い関係があったと考えても不自然ではない。

このようなインドとギリシャとを一つにしたより大きな世界、この世界を基盤にしてギリシャ的手法と容姿をもったガンダーラム仏が作られるのも当然であろう。然うしてこれに刺戟されて、マトーラにマトーラ仏が同時代に生れたのは、西洋の理智を現わす冷たい青黒い岩のガンダーラム仏に対して、赤色の砂岩に堀出された豊満なマトーラ仏はインドの仏としてその対比が興味深いものである。

この一つのインドとヘレニズムを更に一つにする精神的社会的風土に於て、然もその外的影響や刺戟によって湧き出るインド自身の生命力、大乘仏教の現成とヒンズー教の成立とが、混然としてそこに新たな世界を生むのである。それはしたがって、最早印度そのものではない。西と東の文化の、印度による綜合なのである。

この地盤から般若経、大毘婆娑論（一二九—一五三）法華経（後一〇〇年主要部完成）大智度論（一五〇—二五〇竜樹）無著世親（二〇〇—三九〇）の認識論（三三三—四〇〇）…の歴史的な人類最高の文化が華を咲かせる。

特に私の興味をもつのは、無著世親の唯識論は「すべてのものが空なることは疑いなき事実であるが、それが我々

の意識によって認識される。この識こそ絶対」とする一元論的觀念論は、大乘仏教が宗教的に一神論的に展開する（阿弥陀仏、久遠仏）のと対応して、更にこのより広い一つの世界の現成と無関係ではあり得ないといえよう。

古来より弥勒はイランのミスラーであり、阿弥陀仏は西方のものであるという。

私は、内在的から超越的に変りゆく神のあり方、自ら悟る道から救済慈悲にすがらんとする方向の転換に、何か異質のものがあるとする考えに答える余裕はない。然し人間の論理の必然として人間の弱さ、実存の自覚と共に救いを求める方向が仏教自身の中から出て不自然ではないであろう。しかし一歩退いて、この考えの変化がキリスト教や回教の出て来る砂漠的宗教の地盤との接触に *Affektwerden* アフェクトウェルデン されたとしても、即ちこのより広い世界に於て他の思想が刺戟となつて、自らの自覚を深くし、自らの中から出て来たと言えないことはない。

この一つの例がヒンズー教の成立である。後一八〇年、釈尊が意欲的に用いたパーリ語を、又サンスクリットにもどしバラモン教を民衆化した新たな宗教を成立させたことである。

これはクシャーナ朝が、外夷の侵入に疲れた、が出て来た頃、印度中原のマガダ国にチャンドラグプタ（三二〇—三三五）が現れてグプタ朝を作り、中原を支配した。そして復古的な農村経済封建的な国家を作った。この社会の沈滞固定化には、やはり仏教よりもバラモン教の方が適してゐたことは論をまたない。然し時代は進展する。一日も止らない。その農村はやはりこの広い世界の洗礼をうけた農村でもある。従つてそこに成立したヒンズー教はバラモン教そのものではない。即ちヒンズー教はリグベータの神々の伝統をうけては居るが、バラモン教の貴族性より民衆性にその特徴をもつて居る。然もその三主神は

ブラフマー……（宇宙の創造を司る神）

ヴィシイヌ：（宇宙の維持を司る神）

シパー……………（破壊を司る神然もヒンズー教では究極的な破壊はないからやはり最終的にはこれも創造の神）

であり、大陽スーリヤ、火アグニ、雷電インドラ等、多くの自然現象を神格化し、その組合せが、我々の運命を支配する等、モンスーンの風土性とバラモン教的伝統を意味することは勿論であるが、然しこゝに持筆さるべきことは、かのボンベイのエレファンタ島の窟院の彫刻に示される如く、三神が即一身という思想が出て来てゐることである。ウパニシヤッドでも多くの神々がブラフマン（アートマン）に統一される思想は出てゐる。然しそれは哲學的觀念の上だけに止るものであった。ヒンズー教の地盤は大乗仏教と異つて閉鎖的農村ではあつても、やはり、ヒンズー教も時代の子であり、二世紀の大乗仏教の成立した「より広い世界」「より普遍的世界」の上に現成した宗教であるといえよう。だからこそ一神教化の道をたどつたといえよう。（勿も不完全ではあるが）

このように印度中原に於ての経済社会が閉されたものになつて行くに従つて仏教の道は自ら衰退の道をたどるのは自然の道理であり、あの七世紀パーラ朝時代の密教の成立も、いわゆるヒンドゥー化した仏教の成立も、いわば一口に言つて仏教の農村化への努力であつたと言えよう。然し、もと／＼普遍化を求める開かれた社会の原理たる仏教が、閉された社会に生きようとするのはどだい無理なことであつた。そこには、寧ろ仏教としての生命が失われ、かえつて寿命を短くするのである。

然らば北西インドでは如何であらうか。さしも栄えた西北インドもエフタルの何ものをも残さぬ侵略の殘酷さによつて仏教は遂に北西インドから中原に難をさける、この中原も前に述べた通りである。仏教は所詮安住の地はインドに求められなくなつた。為に北西インドから支那に渡るのである。

然し永く仏教史の上に記憶に残り、その教義の深化に逆に影響を与えた大事件があった。

即ちミヒラグラ王（五〇二—五四二）の残酷さは蓮華面経を成立させその主人公として登場する程である。然もこのフン族の侵入迫害と関係ありといわれる姚秦（三八四—四一七）北魏（三八六—五三四）にわたった訳経僧は、全部ガンダラ、カシミール、ウドヤーナ出身であることは、この地が仏教の中心であったことを示し且つ又如何に長年月にわたって執拗に、侵略が重ねられたことを示している。又この訳経僧も北齊より隨、唐まで続くが、その後全々なくなつて了つたことは仏教がこの地方になくなつて了つたことを示している。然も六世紀後半に、ミヒラグラの後三十年から五十年という短時間の六世紀後半に蓮華面経が漢訳され、又末法の文字がみえたという事実は、如何にこの法滅の事実が切実であつたかを示し、又この経典と同一訳者の大集経に同じく「正像末」の末法意識が出來し、法華経も約同時代の羅什訳によつて「末法」が訳出されるのは、このインドに於ける法の滅亡する、まさに「末法」の現成とその自覚と無関係ではなからう。

結 語

古來般若経の中に出てゐるその流布の予言は歴史的にも社会史的にも、当時の社会状態と合致して居ると言われて居る。即ち初期経典たる道行般若経（AD一七九漢訳）は南天竺→西天竺→北天竺にこの経がひろまるであらうと言ひ。末期の大般若経第二分（AD六六〇—六六三玄奘訳）は東南→南→西南→西北方→北方→東北方とある。これはその政治的に榮えて居た国をさし、又当時の自由な商業經濟の中心地と符合して居る（中村元氏）といわれて居るところからして如何に仏教がその商業經濟と相関であり、又その商業經濟圏の拡大と仏教の理念の普遍性が相関関係であるかこの一事をもつても理解されよう。

このように思想はその基盤の自己自覚として成立する。成立するやこの思想は逆に基盤を規定し指導する。やがてその基盤は前の基盤ではなくなる。このギャップ。そしてこのギャップを通じて新たな基盤を志向し、又そこから新たな基盤が、そして又そこから思想がと、弁証法的に続いて行く。